

21 世紀にこそ通用する “本物の田舎” を目指す

上川管内・中川町 NPO法人ECOの声

人は、あまりにも身近にあったり、日常的に見慣れたものの価値に気づかない場合が往々にしてある。いわゆる「灯台下暗し」。上川管内中川町の人たちもそうだった。四季折々に織りなす森と川のすばらしい自然、そこから得られる数々の恩恵、まつわる文化…。その貴重さに気づき、再発掘、保存して、21世紀にも生き残れる“本当の田舎”を目指そうと創設されたのが中川町の NPO 法人「ECO の声」。10 年間にわたる地道な活動に多くの町民が賛同し、自然との共存というまちづくりに町ぐるみで邁進している。

■ “お宝” 発見体験 キノコ刈り

「あっ、みつけた」、「これ、食べられるかしら」——静まり返った森の中に老若男女のはずんだ声がこだまする。これは「ECO の声」が昨秋、町民を対象に近くの北大演習林の中で行った森の幸発見活動「キノコ刈り」のひとつ。参加した 30 人ほどの町民は、キノコをゲットする度にほおを紅潮させ、声を上ずらせた。「これは貴重なヤマドリタケです」ガイドをするのは「ECO の声」副理事長の鎌田守さん（71）。キノコにかけては地元でも名を知られた“キノコの達人”だ。

「この木はヤチダモ。こっちはミズナラ」すかさず近くに生える樹種を説明するのは理事長の三箇（さんか）利勝さん（69）。三箇理事長は長らく造材業を営み、木の樹種や特

徴については博士級の造詣を持つ“木の達人”。二人の説明に参加者たちは大きくなづき納得の表情。

採れたキノコはその足で集会所に持ち込まれ、キノコ汁に。色々なキノコから素敵なダシが出てそのおいしさといったら。参加者全員は、改めて“山の幸”をふんだんに贈ってくれた“ふるさとの山”のすばらしさを見直し、そこに住んでいることの幸せをかみしめ



こんなすばらしい滝があったんだ。琴平の滝探検で我が町お宝に満足する町民たち

た。

中川町は、わが国最北の大河「天塩川」を中心に、両岸に広がる広大な森林と、その中を流れる大小 60 数本の支流と共に水と森の織り成す山紫水明の地。そんな豊かな自然は、アイヌの住む昔から人々の生活と深くかかわり合ってきた。たたずまいはいまま変わりな

いが、時代の流れは人々の暮らしを大きく変えた。便利さと効率を求めるあまり、自然とのつながりは次第に薄くなり、森の大木は伐採されたまま復元されず、川の汚れも進んでいった。同時に川や森へ対する畏敬の念や、恵みに対する感謝の気持ちも忘れられがちに……。

この失われつつあった自然の貴重さを気付かせてくれたのは、中川の自然を求めて訪れた観光客や町内にある北大演習林に来る北大生、先生たちだった。「中川には他では得(見)られない豊富な水と森林がある。この貴重な財産を掌握し、守り、後世に残すことこそ町民の努めではないか」——“ヨソ者の目”は、温かくも厳しくもあり、まさしく“灯台下暗し”の脚下に、一条の光を照らしてくれるも



「うん、順調な生育ぶりだ」——晴れの植樹の日を待ってすくすくと成長する幼木たち

のだった。

■ NPO「ECOの声」誕生

この評価に敏感に反応したのが、三箇さん、鎌田さんといった地元の各分野で名人、達人といわれている人たち。「我々の力で何とかできるかもしれない」と、数人の“達人”が集まって立ち上げたのが「ECOの声」だ。ECO

は、声を出せばはね返ってくるこだまの「エコー」と、環境を守り育てる「エコ」を兼ね合わせた命名。2004年(平成16年)6月のことだった。

目指すは山の彩、風のそよぎ、森の香り、おいしい水、アスピリンスノー……など、中川でしか得られない“お宝”の再発見と保護。ここに身を置くだけで五感に伝わり、心を癒してくれる地域づくり——つまり「21世紀にこそ通用する本物の田舎」だった。

そのためにまず必要なのは、住民に自分たちの身の回りにある自然がいかに貴重なものであるかを知ってもらい、知った人一人ひとりが土地の案内人になること。この思いから「ECOの声」の活動は森林と天塩川、そしてその支流の探索から始まり、さらにそれにまつわる伝説や歴史の発掘へと広がっていった。

これらの活動を支えているのは“キノコの達人”、“樹木の達人”をはじめ、地元でその道の名人、達人といわれるスタッフたち。川や川魚のことならまかせて、という“川魚と釣りの名人”、地元で見つかった化石を研究する“化石の権威”、“植物に関してはなんでもござれの“植物名人”など等。この人たちは季節やスケジュールに従って町民をフィールドに連れ出し、地域にある貴重な“お宝”に気付かせ、知識を伝授する。活動は森林ウォーク、北限のカツラの木探訪、琴平の滝探勝、カエデの木からの樹液採取、化石の探索・発掘、川魚の魚類相研究、カヌー体験、キノコや山菜採り……と、山、川、関連した文化の発掘、探索と目白押し。

これについて三箇理事長は「みんな、まちの貴重な自然の発見と守りのため快く力を貸して下さり、有難い限りです」と、感謝。参加した町民も「行く度に新しい発見があり、我がまちはこんなにすばらしいんだって気付かされ、守らなきゃ、の気持ちになります」と感激的。

さらに昨年（2014年）、このメンバーに願ってもない新顔がお目見えした。木のクラフト製作者の仙台出身・斎藤綾子さん（29）。町のまちおこし協力隊として臨時職員に採用され、品質では折り紙つきの中川産の木材の端材を使って食器や調度、文具などを創り始めたのだ。端材の有効活用を模索していた面々は「これで中川の魅力が一つ増えるかも」と大歓迎。いずれ“名人”の一員になってもらい、町内外の人たちに木工クラフトの手ほどこきをしてもらおうと期待を寄せている。

■ 昔の手つかずの自然、いまも

一方、種々の探索活動によって、昔の自然が今も残る発見も多い。その一つに、医師でアララギ派の歌人だった故斎藤茂吉が1932年（昭和7年）夏、来町した際に詠んだ歌がある。茂吉は、町志文内（現共和）の診療所で医師をしていた兄・故守谷富太郎氏を訪ねて5日間滞在し、47首の歌を残した。

あおあおと おどろくばかりの太き藪が澤をうずめて生いしげりたり

志文内の 山澤中に生くという岩魚いわなを見ればひとつさえよし

探索によると志文内の奥の沢には、今も直径7~8センチ、高さ2メートル上、切ると

シュッと水が吹き出るでっかい落の群落があるという。また源流に近い清流にしか生息しない岩魚も、いまま各支流の上流部に沢山いて、釣り人の垂涎の的だそう。ちなみに兄のいた診療所はいまは取り壊されて茂吉公園となり、道内外の歌人のメッカになっている。

■ 委託事業も活発にこなす

これらの活動に加え、NPOの設立当初から町からの委託で行っている仕事に、樹木の植栽・植樹による森の再生事業と、町営のオートキャンプ場・ナポートパークの管理・運営がある。森の再生事業は、この地にしかない樹木の再生を狙ったもので、ミズナラ、カツラ、ニレ、ヤチダモ、クルミなどの種を、演習林に来る北大生らの協力で採取。それを自前の苗畑に植え、ある程度育ったところで森へ植林し、明日の美林づくりへ貢献してい



きれいに整備されて来訪者を待つオートキャンプ場・ナポートパーク

る。苗畑では熱心な手入れで年度ごとに高さを変えた幼木約2万本が整然と育ち、森への登場の日を待っている。

ナポートパークの管理・運営は、ここにNPOの本部事務所もあることもあって力が入り、芝生や立木、生け垣の手入れ、駐車場

やバーベキュー設備の整備など仕事は膨大な量。ほかに通年で、町や町観光協会などのイベントへも積極参加してまちの豊かな自然のPRに余念がない。この結果、町の人口こそ増えはしないものの、すばらしい自然にあこ



バイパス通過で森林は傷つかないかー真剣な面持ちで川環境調査に当たる北大生と「ECOの声」のメンバーたち

がれて訪れる観光客は年々増えており、「ECOの声」の活動が着実に実を結んでいることを物語っている。

こんな中で、今最も力を入れて取り組んでいるのが音威子府バイパス新設に関し、できるだけ自然に傷をつけないように、の願いで行っている森林および動植物への影響調査と監視活動だ。これは町と並行して走る国道40号線のうち、隣村・音威子府村と町西北端間約30kmを、山側に迂回させてバイパスを通すことで20kmに短縮させる工事。距離が短くなるだけでなく、冬の吹きだまりや雪崩がなくなり、交通事故の減少も期待できると、住民もかねて望んでいた新道だ。問題は、この道路が、町の目玉財産でもある北大演習林を通る点。これには北大側も反対していないが、条件は森林へのダメージを極力、低くして欲しいということ。

工事担当の開発建設部も20km間に8つの橋、2つのトンネルを作るなど自然への傷みをできる限り少なくする配慮をしているが、なお念のため北大、開建双方は工事期間を通して森林、河川、生態系などへの影響調査と監視を提案、これを三箇さんらに事業として託した。完成は2018年(平成30年)の予定だが、「中川の自然を守り、後世へ伝えるのは我々の努め」とするメンバーたちは、この新しい活動にエネルギーを注ぐ一方並行して自分たちの育てた苗木をバイパス沿線に植え、道路と森林が調和した環境を残そうと考えている。

これら活動を支えるNPOの財政は、会費、各種活動の参加費、それに町や北大、開建などからの委託料などでますますの黒字。ただ育苗や植樹に対する町からの支払いが年度末に1回なので、その間のつなぎ資金の調達が悩みの種だそう。とはいえNPOのメンバーは「どこにもない21世紀の偉大な田舎をつくるんだ」と意気軒昂。三箇理事長も「目先のことにとらわれず、夢を持って楽しみながら、百年後の人たちに評価される地域づくりを目指したい」と決意を語っている。

■ 連絡先

〒098-2802

中川郡中川町字中川417

NPO法人 ECOの声

理事長 三箇 利勝(さんか としかつ)

TEL: 01656-7-2063

E-Mail: eco-koe@wine.ocn.ne.jp